

保育ステップジャンプ

Hoiku Step jump



発行者

千葉県民間保育振興会

代表者 高橋 克文

編集者 藤井 威郎

事務局 千葉県松戸市東松戸 1-2-34

〒270-2225 音のゆりかご保育園

TEL 047-712-1056

FAX 047-712-1057

総会のお知らせ

平成 30 年度 千葉県民間保育振興会総会

期日：平成 30 年 5 月 15 日 (火)

場所：千葉千シティタワー

【第一部】 総会

時間：13 時 30 分～14 時 30 分

【第二部】 講演

テーマ：保育所保育指針の改定について

講師：猪熊 弘子 氏 ジャーナリスト

(東京都市大学人間科学部客員教授)

平成二十九年年度

第二十二回 保育者の集い

テーマ「もつと好きになる」

開催日：平成三十年一月二十七日(土)

場所：京葉銀行文化プラザ6・7階

第一分科会

「思いやりのある関係づくり

〜アサーショントレーニングを

通して〜」

講師 菅沼 憲治 氏

(聖徳大学心理学科長教授)

報告者 東進ホップキッズ

主任保育士 三浦里美

「アサーション」とは、

「相手を立てつつ自己表現

をする」という意味です。今

回、第一分科会では、アサー

ショントレーニングについ

て、聖徳大学心理学科長の

菅沼憲治先生に教えていた

いただきました。人に送るメッ

セージには、送り手も受け

手も「いい感じ」になる肯定

的メッセージと“気が重く

なる”否定的メッセージ、“



爽やか”になるアサーティ
ブなメッセージの3つがあ
るそうです。中でも、アサー
ティブなメッセージは、ワ
ンパターのメッセージに
一つエッセンスを加えるだ
けで、相手に好意的に受け
取ってもらえるのです。続



いて、「アサーティブ・チェ
ックリスト診断」を行いま
した。自分がどんなタイプ
の人間かを知り、他の受講
者と結果を見せ合い、いろ
いろなタイプの人があるこ
とも理解しました。その後、
受講者6名の協力のもと、「
アサーションいろはかるた
エクササイズ」を行いました
た。エクササイズの一つ「ほ
めほめシャワー」で、初対面
の人の良いところを探して
ほめ合い、少し意識するだ
けで相手に対する見方を変
えられることを学びました。
最後に、菅沼先生から「メッ

セージは言葉7%、口調38
%、表情55%で、『和顔愛語
(わげんあいご)』とい、ほ
ほえみ、ほめることを大切
にして子どもや保護者、職
場の人と関わってほしい」
放電しっぱなしでは和顔愛
語は実行できず、自分自身
の充電も大切」というお話
がありました。参加者のア
ンケートに「自分の充電が
忘れがちになっている」と
いう内容が多かったのが印
象的でした。私たちは、日々
の保育のために体力や気力
をたくさん使っています。
そのため、自分自身の事を
後回しにすることが多く、
これは保育者共通の課題か
もしれません。今後は、保育
者自身が自分を認め大切に
し、適度な充電を心がける
事です。心にゆとりがあれば、
周りの人に思いやりの
気持ちを持って関わり、良
い関係が築ける事でしょう。



安田式体育遊び指導法に
基づき、なわとび、てつぼ
う、マット、跳び箱の指導
法・補助に仕方について学
んだ。安田式体育遊び指導
法とは、体力増強や技能向
上を第一の目的にせず、体
育遊びを通して脳や全身の
機能器官を育むことと、人
間形成を第一の目的として
いる指導法。なわとび、て
つぼう、マット、跳び箱に
ついていきなり始めても上

第二分科会

「年齢・発達に応じた

楽しい体育遊び」

講師 齋藤 元輝 氏

(エール株式会社)

安田式体育あそび研究所

報告者

ナーサリー木の実

保育士 澤田 亮輔



手くはいかない、どういう遊びから始めればできるようになるのか(導入の仕方)、声かけの仕方、テンポ、褒め方、補助の仕方など学んだ。導入のしかたについて、遊びで段階を追っていく、簡単な遊びから始める、そしてどんどん続けることが大事であることを学んだ。導入の仕方も含めた今後の保育を考えていく。子どもの出来ないところばかりをみてしまい「こうだからできない」と否定的な声をかけてしまいがちだった。「こうしたらできる」



次はこうしてみよう」など、できるためにはどうしたらよいか、肯定的な声かけをすることで、子どもがやってみようという意欲につながる。テンポについても、心拍数に合った号令をかける。いつも同じようなテンポで話すのではなく、わかりやすく、短い言葉で繰り返し話すことで子どもの心に響く。また、やってほしいことを先に言うこと(先褒め)が子どもの意欲を引き出す。声かけ一つで子

どものやる気が変わる、苦手意識が変わる。声かけの仕方一つ一つを見つめ直していかななくてはならないと感じた。また、待っているときも、子どもが「楽しそう」「やってみたい」「出来そう」と感じられるように工夫していきたい。今回の研修で、自分を見つめ直し、新たな気持ちで子どもに向き合っていきたいと思った。

第三分科会

「先生のためのひらがな講座」

講師 前原 洋子 氏

(筆友会ふでともかきかた

教室代表

報告者 佑和保育園

保育士 松丸 彩未

1月27日に京葉銀行文化プラザにて行われた保育者の集い第3分科会は横浜市を中心に活動をされている、筆友会「ふでともかきかた教室」代表前原洋子先生を講師にお招きしました。子どもだけでなく先生向けに

講座を開いていることもあり子どもへの教えかたや保育所保育指針の改訂なども組み込んでお話ししてください、文字と保育にも深い関わりがあることを認識する良い機会になったと感じました。仮名の成り立ちを教わり、ひらがなを書く上でのポイントを教えていただきました。①もとになっている漢字の字形を意識する。②草書から来ているので柔らかく書く。③一字ごとのポイントを押さえて書く。この3つを意識することでうんと文字が上達することのこと。

また、正しい姿勢や鉛筆の持ちかたをすることで疲れずたくさん文字を書くことができることと教わりました。基本的なことを教わった上で練習プリントにてひらがなを書いたのち、先生に添削をしていただいたことから講座を受けた先生たち



ちから「とても嬉しかった」「添削してもらいたくなった」と言う感想が届きました。前原先生から講座を受けた先生方の名前のお手本、よく使う言葉ベスト20が書いてある練習プリントをいただきました。子どもたちが文字へ興味を持ち始めた年齢は3歳からが多いという。日常生活の中で文字への関心が生まれることから保育園で長い時間生活する子どもたちにとって先生の文字は大きな影響を与え



ると言われ私も背筋が伸びました。また、先生たちの字は子どもたちだけではなく保護者にも良い印象を与えられる良いきっかけになるであろうと考えました。私を含めこの講座を受けた皆さんが少しでも自分に自信が持てるようになる分科会になったのであれば嬉しいです。アンケートから需要があることもわかり、機会があれば再度この様な分科会を企画したいと思います。



「明日から役に立つ！子どもの育ちとケガへの対応」
日々の保育の中で大切なことは、子どもの発達を見極め大きなケガや事故につながるらない環境を提供すること！私たち保育者も環境

第四分科会
「明日から役に立つ！子どもの育ちと怪我への対応」
講師 萱岡 吉子 氏
(元東京通信病院 看護師)
報告者 城の星おおたかの森保育園
主任保育士 寒河江 純子
あまねの杜保育園
主任保育士 田村 由紀子

のひとつ(人的環境)ということで、現在夏見台幼稚園・保育園にて看護師として勤務されている萱岡吉子先生に、実際保育の中で起き易いケガや事故への対処法、大きなケガをしない為の予防法等について学びました。気付き、今後の課題、継続したいこと。まずはケガを予防する為に、私たち保育者がしっかりと発達を把握すること。そして、年齢にあった環境を整えること。この2点を踏まえ、園全体で安全教育を積み重ね、子どもの情報や、どんな時ケガ(事故)をするのかなど、共通理解しておくことの大切さを学びました。心肺蘇生法、食物アレルギー、感染症、熱性けいれん等、実際に起こった時を想定して保育者が知識を身につけておくこと！そうすることで、慌てず対応する事が出来ます。改めて、園内でのマニュアル



ル作りの必要性を感じました。119番の通報手順、薬の依頼書、熱性痙攣について等、実際に現場で使用しているプリントを提供して頂いたことで、それを土台として作成していきたいと思えます。今回、保育者に出る手当。打撲、噛み付き、発熱の時の適切な冷やし方。便利な衛生グッズ。鼻血の鼻せんの作り方等も丁寧に教わりました。なにより、実際の保育での事例と共に話が聞けたので、とてもわかりやすく、興味深い内容の2時間でした。改めて保育者一人ひとりが発達を知ることの重要性、曖昧な知識で子どもと向き合う怖さを感じました。大きな事故

が起きたとき、責任は傍にいた保育士が問われる。この言葉の重みをしっかり受け止め、今回学んだ知識を生かし、今後も保育者として安全な環境作りを提供できる様学んでいきたいと思えます。

第五分科会
「ちよこつとワザ」
講師 齋藤 清美 氏
(東京福祉専門学校 保健体育講師)
報告者 こうぜん保育園市川
保育士 四家 真梨菜

第五分科会では、「ちよこつとワザ」を教えていただきました。前回は好評だった講師の先生で、今回が3回目となります。席にたくさんの方の材料が並びこれからどんなものを作るのかワクワクした気持ちの中始まった講義。今回は傘袋やごぼうの野菜袋を使ったロケットや、ふたを開けるとパラ



パラ飛び出す牛乳パックのバンドラの箱、折り紙で作った凧など全部で7つ作りました。作っている時は説明を聞きながら集中して取り組んでいたのでもとても静かでしたが、完成したもので遊んでみると「おー!」「すごい!」と驚きの声や歓声が一気にあがっていました。また、遊びの工夫や実際に子どもたちと作る時にどんな援助をしたら良いのかなども教えていただきと

でも参考になることばかりで、たくさん吸収できたと思います。おもちゃ作りが終わった後は曲に合わせて踊ったりジャンケンをしたりと体を動かす遊びをしました。二重の円をつくりペアを変えて踊った時は初対面同士でしたが、自然と目を合わせ一緒に楽しんでいく姿が多く見られ、笑顔溢れる時間となりました。普段から保育等でよく使っている牛乳パックや紙皿などのいろいろな素材も、こんなに楽しいおもちゃに



なるんだと感心したと同時に引き出しを1つ増やしていただきました。受講された皆さんからのアンケートでも「1つ1つ作り終えた時に達成感と感動があった」「子どもがとても喜びそう」「子ども達と一緒に作って遊びたい」などが多くあがっており、帰り際の表情も明るくなっていたので、とても充実した時間が過ごせたのではないかと思います。私は研修を企画していく立場になることが初めてでした。どんなことを学びたいのか、知りたいのか考えて準備した内容で、参加した方々が「楽しかった」「参加して良かった」と思ってくれていることがとても嬉しく、この会に携われて良かったと感じました。

第六分科会

「子どもの表現から

その心持ちを読み解く」

講師 鈴木 まひろ 氏

山口 和孝 氏

報告者 第二勝田保育園

主任保育士 三橋 吾郎

平成30年1月27日、京葉銀行文化プラザにて保育者の集いが開催されました。数ある分科会の中から、私は「子どもの表現からその心持ちを読み解く」研修会に参加させていただきました。この研修会は千葉県民間保育振興会が企画され、年度を通して保育実践研究会として行われているものを、今回の保育者の集い分科会にて行われるものでした。私自身今まで興味はあったのですが、参加させていただく機会がなく、今回またとない機会だと思い、他園の皆さんと共に鈴木まひろ先生の講義をお聞きしました。

内容としてはタイトル通り、子どもの表現を私たちはどのように捉えて理解をし、向き合うとよいのかを、これまでの保育モデルや海外の教育観を踏まえてのお話でした。そこで私たちが子ども達の心持ちを読み解くには、私達保育者の心持ち（心がけ）を意識する必要があります。あるのではと改めて感じました。

前半の内容を踏まえ、研修会後半では司会者や書記を決め、グループワークを行いました。ある子どものエピソードを通し参加されている方と、その子はどのように感じて表現しているのか、私たちはどう関わって手助けが出来たらいいかなどを語り合いました。語り合うことで多面的に子どもの姿が見えてきて、初めて語り合う場でしたが短い時間でも自身が濃く話せたと思います。新指針にも明

記されている「主体的で対話的で深い学び（アクティブラーニング）」を保育の中でどう活かすかも垣間見えたのではないかと思います。今回の研修で学び得たものを、自園の園内研修に組み込んだり、私たちの心持ちについても伝えていきたいと思えます。実りの多い研修会をありがとうございました。

保育者の集い全大会

「子どもの貧困について」

〜私達、保育者に出来ること〜

講師 胡内 敦司 氏

（松戸市総合政策部

子ども部兼教育委員会

学校教育部審議監

報告者

かいづか保育園
松丸 健太郎

保育者の集いが1月27日に行われ、その全体会に参加しました。会の題目としましては、「子どもの貧困について〜私たちが、保育者にできること〜」ということで、胡内敦司氏による講演で、もちろん保育に関わってくる内容ではあるのですが、どちらかといえば社会的な感じの内容でありました。子ども貧困というと、私はどうしても海外にあるスラム街の光景や、アフリカで泥水を飲んでいるような子どもの姿が真っ先にイメージされました。しかしながら、今回の話を聞いて子

どもの貧困というのは、実はそんな遠い国や場所の話ではなく、もともとと身近にあるものであるということに気が付きました。また、衝撃的なデータも示され日本は先進国においての貧困率がとても高いということでした。

昨今において有効求人倍率が高くなった、株価の上昇等の景気における良いニュースが取り上げられがちですが、実はそういった貧困率が高く、子どもの6人に1人が貧困であるということに衝撃を受けました。そして、これは日



々の保育園でのことでもありませんが、やはり一人親家庭における経済的な苦労というものも大きく、それによつて統計上ではりませんが、将来的な子どもの進路もかなり限定的になってしまふということも想像の範囲内でしたが、実際にデータで示されると身近に現実に起こっている出来事として認識することから、そのような問題に向き合い、何が出来るかということを考えることになる非常に良いきっかけとなる講演でありました。自分自身が、そういった家庭がいる身近な環境に身を置きながら、何も出来ていないということを改めて認識し、講演でも少し話の出ている「子ども食堂」をいくつかというところまではいかななくても、まずはそのような問題が現実的に起こっているということをしつかりと認識し自分自身で

きることからでもはじめていけるようになりたいと思えるようになった内容でした。話の内容としては少し重苦しくなりがちでしたが、胡内氏のユーモアを交えた話で重くなりすぎず参加した方々も重い雰囲気ではなく内容をしっかりと受け止め、前向きにこのような問題を捉えることができたのではないかと思います。

